

南米の日本語教育実践報告

112

【ペルー】 多嘉山アントニオ(ペルー日系人協会)

日本語教育実践報告（ペルー）

ペルーにおける日本語教育事情

多嘉山アントニオ

ペルー日系人協会日本語普及部

〔キーワード〕 ネットワーク、南米スペイン語圏、モチベーション

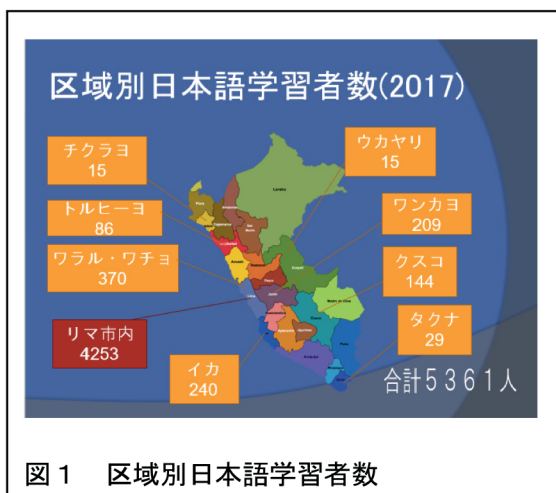
〔要 旨〕

ペルー日系人協会日本語普及部は、ペルー全土に日本語を普及するという目的で日々活動を行っている。ペルー全土での実地調査及びアンケート調査によりペルーの日本語教育における問題点・課題の把握に努めている。上記の調査を踏まえ、日本語普及部がペルー国内の日本語教育機関に対して取り組んでいる活動を紹介するとともに、共通の問題点・課題をかかえる南米スペイン語圏各国とネットワークを構築を模索している現状について紹介を行う。

1. ペルー日系人協会及び日本語普及部の概要

ペルー日系人協会は非営利社団法人であり、ペルーに移住してきた日本人並びにその子孫により組織されたペルーにおける日系人の代表機関であり、2017年100周年を迎えた。ペルー日系人協会内に設置された日本語普及部は、ペルー全土における日本語普及の中心的役割を担っており、日本語教師の養成、日本語教育のレベル向上、地方への日本語教育の普及、日本語教材の開発及び日本語普及のためのイベントの実施等に取り組んでいる。

2. ペルーにおける日本語教育事情



ペルーにおける日本語教育事情を考察する上で以下の3つの視点が重要となると考える。

1) 日本語学習者の現状 2) 日本語教師の現状 3) 日本語教育機関の現状である。

2.1 日本語学習者の現状

図1が示すとおり、2017年6月に実施したペルー全国日本語教育機関調査によれば、ペ

ルー全体の日本語学習者数は、5361名であり、約80%にあたる4353名が首都であるリマ市内に集中している。日本語学習者数は、都市の人口に必ずしも比例するものではない。例えば、ペルー第2の都市であるアレキパ市には日本語教育機関が存在しない。日本語学習者数は、様々な要素により大きな変動があると考えられる。個人による学習者がリマに次いで多いのは、クスコ市であるが、クスコは世界的観光都市であり、日本からの旅行者に対応するガイドの需要があり、数値が高くなっている。その他、日系人の居住地であるかどうか、歴史的な要因も大きく影響している。しかしながら数的な影響を最も及ぼすのは、小中高校等の一般教育機関が学習課目として日本語を取り入れるかどうかによって大きく数字が変動する傾向が見られる。

機関別日本語学習者数			
	リマ	地方	計
初中等教育機関	3364	766	4130
高等教育機関	145	67	212
その他機関	744	275	1019
計	4253	1108	5361

表1 機関別日本語学習者数

また、機関別にみた日本語学習者数は、表1のとおりである。ペルーの日本語学習者総数5361人のうち約77%にあたる4130人が初中等教育機関で日本語を学んでいるという状況である。ペルーにおける日本語教育の特徴の一つとして、大学等高教育機関での学習者が少ないことが挙げられる。ペルーにおいては、大学に日本語あるいは日本関連分野を専攻できる大学は一つも存在せず、日本語講座がある大学においても、正規の単位として認定される大学はごく僅かという状況である。

2.2 日本語教師の現状

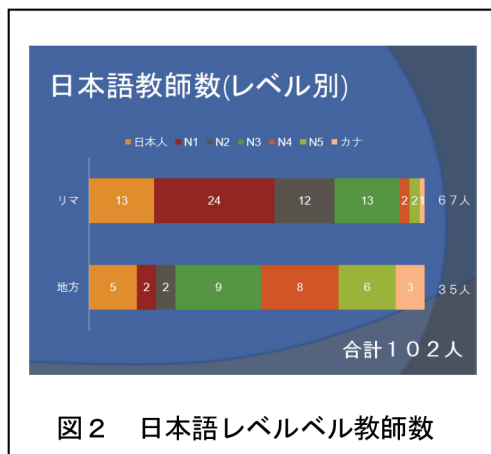


図2 日本語レベル別教師数

ペルーにおける日本語教師数を日本語能力別に分析したのが図2であり、リマと地方では、大きな差が見られることがわかる。リマでは、ネイティブ及びN1,N2レベルの教師が、教師全体の73%を占めるのに対し、地方では全体の約26%に過ぎない。地方における日本語教育の問題点は教師不足はもちろんであるが、教師の日本語能力にも問題があると言える。

2.3 日本語教育機関の現状

ペルー日本語教育機関数			
	リマ	地方	計
初中等教育機関	6	5	11
高等教育機関	4	2	6
その他機関	5	11	16
計	15	18	33

表 2 日本語教育機関数

2017年6月のアンケート調査によれば、ペルー全土での日本語教育機関は、表2で示したとおり、33カ所となっている。リマよりも地方の教育機関の合計の方が多く、日本語学習者総数の約80%がリマに集中していることからわかるように、地方においては小規模の教育機関が多い。

3. ペルー日系人協会日本語普及部の活動

前項では、ペルーにおける日本語教育を学習者、教師、そして日本語教育機関という観点から現状を見てきた。ペルー日系人協会日本語普及部は、ペルー全土の日本語教育を統括する立場にあり、上記の日本語教育の現状を踏まえ、日本語普及のため以下のような活動を行っている。

3.1 日本語教師養成1年コース

日本語普及部では、ほぼ隔年で日本語教師養成講座1年コース（220時間）を実施している。本講座の内容は、日本で実施される日本語教育能力検定試験の出題範囲に準じる形でカリキュラム作成を行っている。ペルー日本語教育の質・量ともに充実させることを目指して実施されているが、今後は中上級を教えることができる教師の養成及び、本講座のためにリマ市内での教育を受けられない地方の教師養成に重点を移すことが目下の課題となっている。

3.2 日本語教育地方セミナー

年に1度、地方の日本語教師をリマに招き、日本語教育関連のセミナーを行っている。地方の日本語教師のレベルアップを目指して行っている。

3.3 地方調査及び地方講演会

地方における日本語教育機関の現状調査のため、毎年、主要地域6、7カ所の日本語教育機関を年に1回訪問をしている。昨年度からは、調査だけではなく、地域の日本語教師及び学習者を対象とした日本語教育関連の講演会を行っている。また、本年度からは、日本語教育に関連のない一般の方々も広く対象とした日本語関連の講演会を実施し、日本語学習のモチベーションも持ってもらうことを意図している。

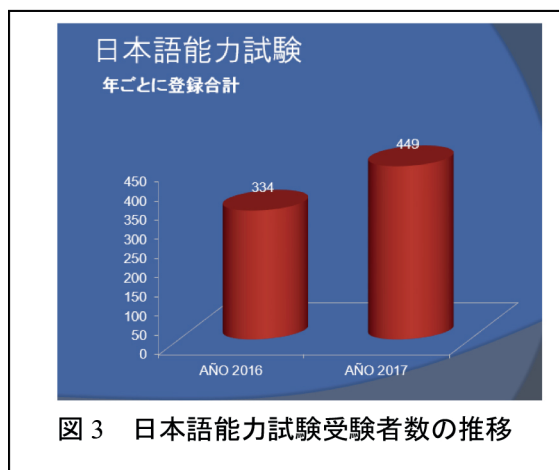
3.4 ペルー全国日本語弁論大会

日本語普及部とペルー日本語教師会の共催で、毎年ペルー全国日本語弁論大会を実施しており、今年で 37 回目の大会を行った。特に日本語教育機関にとっては、学習の成果を発表できる貴重な機会となっており、地方からの参加者も年々増加傾向にある。来年度からは、全国規模の作文大会の実施も企画している。

3.5 南米スペイン語圏日本語教育会議

南米スペイン語圏各国の日本語教育代表者がペルーに集まる会議を年 1 回行っており、今年で 3 回目となった。南米スペイン語圏各国における日本語教育の課題や対応策を共有し、ネットワークを構築することによって、各国の日本語教育に貢献できる道を探っている。2017 年度の第 3 回大会では、勉強会の形式を取り入れ、南米スペイン語圏各国の日本語教育関連の JICA ボランティア及び開催地ペルーの多くの日本語教師も参加し、日本語教育レベルの向上を図る場としても機能している。

3.6 日本語能力試験



ペルー日系人協会日本語普及部は、ペルーにおける唯一の日本語能力実施機関となっている。2017 年度は、特に N5 受験者が急増し、図 3 で示すとおり、受験者総数は全体で前年度比 30% 増となった。現在、ペルーにおいては日本語能力試験は 12 月に年 1 回のみ行われているが、来年（2018 年）から年 2 回実施に向けて準備を行っているところである。

3.7 「学校へ行こう」プロジェクト

ペルー日系人協会日本語普及部の本来の目的であるペルー全土への日本語普及という観点から、「学校へ行こう」と名付けたプロジェクトを本年から開始している。これは、幼稚園から大学まで幅広くその対象とし、日本語学習のきっかけとなるようなセミナー、講演会等を定期的に参加している。今年の講演会のテーマは、「日本語の慣用句」「日本語のオノマトペ」という題目で行った。とくに、ボビー(写真 1)とたかし(写真 2)という日本語普及部独自のキャラクターを制作し、着ぐるみを作って講演会に登場させ、学生達がより親近感を持てるように工夫をしている。また、日本のパナソニックが提供する遠隔科学教室とコラボレーションを行い、

科学を学びながら日本語も学ぶという新しい取り組みも展開している。



写真1 ボビー



写真2 たかし

3.8 日本語会話サークルの運営

日本語普及部は、日本語能力の維持・向上を目指し、3つの日本語会話サークルを運営している。子供達を対象とした「どんぐりクラブ」、青少年を対象とした「しゃべらん会」、そして成人を対象とした「お話し会」である。これらの会の本来の目的は、日本帰りの児童が祖国のリマに戻ってきても日本語を忘れないように会話の機会を作り支援するというものである。また、一昨年からは、お話し会特別講演会を月1回の頻度でおこなっており、様々な分野から専門家を招聘し、日本語による講演を行ってもらい、日本語能力の維持・向上のために寄与することを目的としている。

3.9 独自日本語教材の開発

ペルーの日本語教育機関は今まで様々な日本語教科書を使ってきたが、ほぼ全てがコピー製本した教科書であるという問題点があった。2017年、ペルー日系人協会日本語普及部は、ペルーで初めてとなる、日本語教科書の出版事業に取り組んでいる。国際交流基金の日本語教科書『まるごと』スペイン語版をペルー日系人協会から出版することが正式に決定し、翻訳も日本語普及部で担当した。2018年2月をめどに出版予定であり、各日本語教育機関への教科書の普及が期待できる。

4. 南米の日本語ネットワークの展望について

南米スペイン語圏各国では、日本語教育に関し共通する問題点や課題も多くあり、ネットワークを構築することによって貢献できる分野もあるのではないかと考えている。このような考えの下で、南米スペイン語圏日本語教育連絡会議が実施されている。

2016年度の会議では、9カ国を三つのグループに分け、協力しながら進めて行く方針を決定したが、一年たち、2017年の時点では、イベント担当のアルゼンチン、パラグアイとペルーのメンバーで、大きな成果はみられなかった。グループを作り具体的なプログラムを策定していくことは重要なことではあるが、個人個人の力をどのようにうまく組み合わせることができるのかが、一つの課題であり反省でもある。

一方、ソーシャルネットワークを使用し、南米スペイン語圏の日本語教師が自分の所属している機関の活動や自身のクラスで使う自作教材を紹介するなど、この一年間、情報を共有できたことは、一つの成果であると考えている。

また、第3回目となった2017年の会議では、代表者による会議だけではなく合同セミナーなどのイベントも主催し、日本、中南米、ブラジル、ペルーから日本語教育の専門家達が集まることができたことは、大きな成果であると思える。

また、「ネットワークの運用はこれからどうするか」という課題については、南米各国が当該会議の専門窓口を設けることが会議において決定し、今後のネットワーク構築への方向性が見えてきたといえるであろう。